

英語基礎学力テストにおける誤答分析

松浦 雄二, マユー あき, 小玉 容子
(英文教室)

An Analysis of Typical Errors Based on the Results of English Achievement Tests

Yuji MATSUURA, Aki MAHIEU, Yoko KODAMA

キーワード：誤答分析、英語基礎学力、指導上の留意点

I. 目的

全国的に短大生、大学生の学力低下が問題視されているが、少子化にともない、本学の文学科英文専攻においても学力的に多様な学生を受け入れるようになってきている。こういう状況の中でその多様さの中身を具体的に知ることが、日々指導していく上で必要不可欠となってきた。本稿の目的は、学内で行なった英語の基本的事項の習熟度を測るためのテスト結果を分析し、学生がわかっていることとそうでないことをはっきりさせ、わかっている場合には、どこでつまづいているのか、そのつまづきの原因を探り明らかにすることである。

II. 方法と対象

テスト問題は、市販されている英語検定2級ならびに準2級の問題集より抜粋して二種類作成し、2004年4月と10月の二回実施した。対象は、本学文学科英文専攻1・2年生104名である。誤答のパ

タンに、何らかの著しい特徴が見られたものを選んで、その特徴を分析した。

III. 分析と考察

【語彙】

語彙に関して、特徴的と考えられる問題点を明らかにしていく。

(3) The cat (lay) at full length on the road.

1. laid 2. lays 3. lay 4. lie

これは自動詞 lie (lay, lain) と他動詞 lay (laid, laid) の意味と、これらの動詞の不規則変化の理解を確かめる問題である。約50%の学生が 'lays' を選択しており、正答率はわずか20%程であった。これは主語 'the cat' が単数なので 's' が必要と考え選択してしまい、「横たわる」と「横たえる」の意味の違いを考えるに至らなかったからであろう。'lie' と 'lay' という動詞に関しては、中学、高校時代からその意味の

違いや動詞変化は特に注意されてきたであろうが、このような結果を示しているということは、自動詞と他動詞の違いに対する意識の低さの現れであろう。不規則動詞の変化形が十分習得できていないことも誤答率の高さの一因であると考えられるので、全般に基礎的事項が習得されているかの再チェックも必要である。

(7) If you (subtract) 15 from 29, you have 14 left.

1. add 2. subtract 3. multiply 4. divide

この問題では、正解の 'subtract' を選択した学生は 32%, 4 の 'divide' を選択した学生は 42% で、誤答率の高い問題であった。誤答率が高かったのは、まず、数の加減乗除の一つとしての 'subtract' の意味を知らなかったであろう。そして、選択肢の中から 'divide ~ from ~' 「(~から) ~を分離する, 引き離す」という馴染みのある表現を考え、それを問題文にあてはめた結果、多くの学生がこのような間違いをしたと考える。このように、既に知っている語や表現を用いて意味を通そうとする傾向があり、形が整えば、又は意味が一応通じていると考えると、それでよしとしてしまうことが多いようである。既知の語や表現を用いることは当然のことではあるが、この問題の場合のように数字が問題文の中にあり、かつ選択肢には加減乗除の一つであるとわかる語がある場合、もう少し注意深く考えてみる習慣をつける必要があるだろう。

(9) Would you like tea or coffee? (Either) will be fine.

1. Each 2. Any 3. Either 4. All

代名詞の用法を問う問題である。解答率は、正答である 3 の 'Either' が 44%, 2 の 'Any' が 27%, 1 の 'Each' が 22% である。'Either' は、「(二者のうち) どちらか, どちらでも」という意味で用いられる。一方 'Any' が肯定文で用いられる時は、「(三者以上のうちの) どれでも, 誰でも, いくつ (いくら) でも」という意味となる。問題文のように二者択一の場合は 'Either' を用いるので、'Any' との区別を明確にさせる必要がある。また、'Each' は、「(二者以上の)

それぞれ, めいめい」という意味で用いられ、日本語の意味で学生が理解しようとする時、先に挙げた二語と混同されやすいだろう。

このように日本語での意味が表面上類似している時、学生がそれらを混同してしまう傾向があるので、訳語ではなく英語の意味を正しく理解させる必要がある。この問題のように、日本語の意味が英語の意味や用法を理解する際に干渉し、理解を曖昧にさせる事がかなり頻繁に起こっているとみられる。次の問題でも同様な傾向をその解答にみることができる。

(10) I'm getting tired. It's your (turn) to drive.

1. change 2. order 3. turn 4. circle

62% の学生が正答しているものの、1 の change を選択した学生が約 25% いた。ここで 1 を選択した学生は、「運転を替わる」という意味を問題文から読み取った結果、「変更, 交換」の意味を持ち、日本語で例えばチームプレーの競技の選手交代 (チェンジ) という意味でも使われる change を選択したと考えられる。このように日本語の干渉に関しては特に注意が必要である。

(14) The number of Europeans who visit Thailand every year is very (large).

1. many 2. much 3. popular 4. large

(15) The prices of Japanese automobiles are still comparatively (high).

1. high 2. expensive 3. costly 4. much

(14) の正解率は 65% と、半数以上の学生が 'number' と 'large' の連語関係を理解しているが、これも中学・高校時代から繰り返し学んできたことであると考え、もう少し高い正答率が望まれる。一方、(15) の正答率は約 35%、'expensive' を選択した学生が約 55% と、誤答率が高かった。自動車の「値段は (price)」は「高い (high)」ののだが、日本語的な感覚で「自動車は高価である」と受け止めて、ここでも日本語が干渉し、'expensive' を選んだと考えられる。'number'

ならば 'large' であり, 'price' ならば 'high' であるという連語関係をしっかり習得させる必要がある。

これまで分析してきたように, 誤答率の高さは語彙の難易度によるというよりも, 語法の理解不足が原因となっている例が多く見受けられる。次は選択肢の語彙の難易度が比較的高い問題である。

(5) Anyone who makes so many mistakes (deserves) poor marks.

1. deserves 2. conserves 3. preserves 4. reserves

数種類の学習辞典を調べると, それぞれの語の重要度レベルは, 全てが比較的高い分類に入れられている。この問題の解答率は 1 (正答) が 28%, 2 が 17%, 3 が 19%, 4 が 36% であった。それぞれ 15% 以上の解答率となり, 他の問題と比較すると, 選択にバラツキがみられる。馴染みのない単語, または混同しやすい単語が選択肢に並んだので解答が四分化したと考えられる。しかし, 選択肢の語は難易度が高いとはいえ, かなり頻繁に様々なタイプの英文講読の時に会う語でもあるので, 学生の語彙レベルを在学中にさらに引き上げていきたい。

【動詞】

(31) The boy (had his bicycle stolen) again, even though it was in the garage.

1. got stolen his bicycle
2. had his bicycle stolen
3. let his bicycle to be stolen
4. was stolen his bicycle

[25] Yesterday I went to the store to get my cassette player (checked).

1. check 2. checking 3. checked 4. be checked

(31) は正答率は約 55% であったが, 4 の解答率が約 32% とかなり高い率を示し, また 1 の解答率も約 12% あった。また [25] では, 正答が約 64%, その他が 11 ~ 13% とほぼ同じ程度の解答率であった。

(31) において 4 と解答した受験者は, 意味内容を「少年は自転車を盗まれた」と解してはいるものの, そのまま日本語表現の干渉を受けた結果, 被害を被る主体である 'The boy' と, 盗まれた対象としての自転車を混同している。このような被害の受身を表すには, 英語では使役の 'have' を用いなければならないことを, 学生に認識させる必要がある。

[25] においては, get + 目的語 + 過去分詞の形は, いわば習い覚えた形でもあり, 正答率が高めであるが, 1 や 2 や 4 がかなり解答されているのを見ると現在分詞と過去分詞の意味上の違いの認識が不充分であることや, この構文そのものの理解に曖昧な点があることも示唆されているように思われる。

[26] The actor used to have the tailor (make) his suit.

1. make 2. to make 3. making 4. made

正答率が 15% と低く, 4 と解答した受験者が約 40% と多かった。この問題と同様に受益や被害などを表す使役構文の理解を問うた (31) や [25] では, 正答率が高かったこと, (31) や [25] では正答の補語の部分が過去分詞であったことなどを考え合わせると, 受験者が have + 目的語 + 補語の形では, 補語に動詞の原形がくるよりも過去分詞が入るパターンの方が, 高校までの学習において認知度が高いということを思わせ, 目的語に来る名詞と補語に来る動詞との意味関係をよく考えずに, 反射的に 'made' を選んだ者も多いのではないかと推測される。

(30) Don't forget (to turn) off the gas before you leave the house.

1. turn 2. to turn 3. to turning 4. turned

[24] Don't forget (to bring) warm clothes and boots. It could still snow in the mountains at this time of year.

1. bringing 2. to bring 3. brought
4. being brought

‘forget’ に続く動詞の形が理解できているかを問う問題である。to 不定詞の場合と -ing 形 (動名詞) の場合で意味が異なる動詞があることを、これまで学んできたはずである。(30) の正答率は 66%, [24] の正答率は約 70% と、両者ともに高い正答率ではあった。しかし [24] で ‘bringing’ を選択した学生が約 30% いたし、(30) では選択肢に -ing 形を含んでいないにもかかわらず、to 不定詞を選択できなかった学生の割合は [24] の場合とほぼ同じであった。これは、forget や remember などが目的語に動名詞を取る場合と to 不定詞を取る場合とでは意味が異なることを、正確に理解していない層が存在するというを示している。高校の段階で学んだであろう事柄の再確認が常に必要である。

【仮定法】

(33) If Ted (were) here, he could help us clean our room.

1. is 2. were 3. be 4. being

[27] I wish I (could turn) back the clock and do it all over again.

1. can turn 2. could turn 3. have turned
4. had turned

(35) The baseball game (would have begun) at 3:30 if it hadn't started raining.

1. would have begun 2. had to begin
3. would begin 4. had begun

仮定法の用法では、(33) が 82%, [27] が 72%, (35) が 77% と高い正答率が得られ、仮定法過去および仮定法過去完了の基本形に関する学生の理解度は高い。しかし、‘I wish’ で始まる [27] の仮定法過去の場合、従属節に 4 の ‘had turned’ という過去完了形を選択した学生が 14%, また (35) の仮定法過去完了の場合、3 の ‘would begin’ を選択した学生が 10% 程度いるので、その実態を教員側が念頭に置き、仮定法の基本形を復習させ、その意味を考えることも怠らないように注意をし、指導する必要がある。

【関係詞】

(37) If you want to lose weight, you'll have to be careful about (what) you eat.

1. which 2. that 3. what 4. as

約 70% の学生が、先行詞を含んだ関係代名詞を理解している。しかし ‘that’ と ‘as’ を選択した学生がそれぞれ十数パーセントいる。‘that’ を選択した学生は、関係詞として選択したのか、それとも前置詞 ‘about’ の後にくる名詞相当句として選択したのかは定かではない。しかしそのどちらの場合も、関係詞 ‘that’ の先行詞が無いことに不注意であったり、指示される名詞が無いのに指示代名詞を用いたり、それぞれの語が文の中で持つ意味を考えていないことがわかる。一方、‘as’ を選択した学生は、関係代名詞のように用いられる語として ‘as’ を選択したか、接続詞の意味で ‘as’ を選択したかは定かではない。しかし、‘that’ の場合と同様、‘as’ が文の中でどのように機能し、どのような意味を持つかの理解が不足しているようである。

[29] Greenwich Village in New York is a place (which) attracts young people because of its atmosphere and history.

1. as 2. where 3. what 4. which

[30] Sachiko brought me a souvenir from Canada, (where) she went skiing during the winter vacation.

1. which 2. that 3. where 4. how

[29][30] 共に、先行詞が場所を表している時の関係詞の選択に関する理解度を問うている。[29] の正解率は 30% で、2 の ‘where’ を選択した学生が 60% である。一方 [30] の正解率は約 50% で、1 の ‘which’ を選択した学生が約 30% である。先行詞が場所を表している時は、その先行詞が関係詞節の中でどのような意味役割を果たしているかに注意する必要がある。[29] の場合、‘attracts’ の主格として捉えなければならないので、主格として機能できる関係代名詞

の 'which' が選択されることになる。一方 [30] では、「そこ (カナダ) へ」という副詞の意味を持つ 'where' を選択しなければならない。関係詞の使い方はその意味を考えずに使うことはできないので、場所ならば 'where' と規則のように考えるのではなく、先に述べたように、関係詞節中における関係詞の意味役割への注意を促していく必要がある。

【時制】

時制の問題として出題した次の問題にも、日本語の干渉が原因と思われる誤答がある。

- (41) We (had been waiting) for an hour at the airport when my cousin finally arrived.
1. have been waited
 2. have been waiting
 3. had been waited
 4. had been waiting

時制の問題としては、when 以下が過去なので過去完了形 (3 または 4) を選択した者は約 80% と、過去完了形の用い方に関しては概ね理解をしている。しかし全体の 30% 近くが 3 を選択しているのは、おそらく日本語で「私たちは待っていた」というよりも「わたしたちは待たされた」と考えたためと思われる。英語の 'wait' には、そもそも「(人) を待たせる」という他動詞の意味はなく、「(人が) 待たされた」という意味を英語で表現しようとするのであれば、'be forced (made) to wait' と迂言的に表現するしかない。英語の動詞の自・他の意味の区別に対する意識が薄いことの表れでもあろう。

- (52) The president is said to (have been) ill for the past few weeks.
1. be
 2. have been
 3. become
 4. have become

- [34] A: Are you coming to Jill's party, Dave?
B: No, I don't think so. I seem to (have caught) a cold, so I want to go to bed early tonight.
1. have caught
 2. be caught
 3. catch
 4. catching

(52) と [34] はともに to 不定詞の完了形の理解度

を見る問題であるが、正答率は (52) では 65%, [34] では 33% で大きな違いが見られる。(52) には文末に 'for the past few weeks' という現在完了の継続用法であることを示す副詞句があるために、正答を得られやすかったようだ。一方、[34] はまず「風邪をひいたようなので…」という意味になることは理解していても、主節の動詞 'seem' よりも以前に 'catch a cold' していることへの注意が足りなかったことが窺える。さらに、'catch a cold' は風邪をひくという事態が起こるその瞬間に意味の焦点があるので、風邪をひいて今現在も風邪の症状が続いているという、いわゆる結果の残存を表すためには 'have caught a cold' と完了形になるが、このことへの理解もおそらく不足していると思われる。(52) と [34] の正答率の大きな差はそのまま、現在完了の継続用法と完了・結果用法それぞれに対する理解度の差をも反映しているであろう。

【分詞構文】

- (42) Romeo, (believing) that Juliet was dead, decided to kill himself.
1. believed
 2. to believe
 3. believing
 4. to have believed
- [36] Shigeki hurt his leg (playing) soccer. He won't be able to play for the rest of the season.
1. play
 2. playing
 3. is playing
 4. played
- [39] John, (shocked) at the news of the earthquake, couldn't utter a word.
1. shock
 2. shocking
 3. shocked
 4. having shocked
- (43) (Seen) from the top of the hill, the cars moving in the street looked like so many ants.
1. Seen
 2. Seeing
 3. To see
 4. To be seen

分詞構文の理解度を見る四つの問題全てにおいて、答えとして選択された動詞の形態が現在分詞と過去分詞で 80% 以上になることから、一見したと

ころでは分詞構文としての可能な動詞の形態は現在分詞か過去分詞のいずれかであることは認識されているように思われる。しかし, (42) では 'believing' とした者が約 30%, 'believed' が 50%, [36] においては 'playing' の正答率は 72% と高かったものの 'played' を選んだものが約 20% いることをあわせて考えると, いずれの場合においても規則動詞で過去形と過去分詞が同じ形態をとるので, それぞれ -ed 形を選んだ学生全員が過去分詞として選択しているのかは疑わしい。というのは, (42) と [36] において過去分詞として受動的意味を読み込むには無理があるし, 分詞構文についての理解がなくとも問題文の意味は感覚的に把握できるので, その意味を表すための文法上の決まりごとは無視し, ただ文全体の時制は過去だからということで過去形として選択している学生も含まれている恐れがある。

また, [39] では shocked が 42%, shocking と having shocked を合わせて 55%, (43) では Seen が 30%, Seeing が 52% という結果を見ると, 分詞構文において現在分詞となるのかそれとも過去分詞となるのかという意味上重要な見極めが十分に理解されているとは言えない。(43) では日本語で「(人が) 丘の上から見ると」と解釈し, その日本語の能動表現に引っ張られて単純に seeing を選択したと考えられる。分詞構文の指導においては, 1) 現在分詞であれ過去分詞であれ, その意味上の主語が文の主語と原則として一致すること, 2) 文の主語にくる名詞句と動詞との間に「N が V する」という能動的な意味関係を結ぶことができれば現在分詞になり, 「N が V される」という受動的な意味関係でつなぐことができれば過去分詞になること, この二点をしっかり理解させる必要がある。

しかし, [39] においてはこの分詞構文の指導上のポイント以前に, 英語と日本語の動詞自体の語義に内在する態 (voice) の混同が shocking と having shocked という二つの誤答の原因になっていると思われる。日本語の「ショックを受ける」は能動的に他に働きかける能動詞ではなく動作を受ける意味を表す受動詞で, 吉川 (1995: 89), 寺村 (1982: 140) が「受身的感情表現」と呼んでいるもののひと

つである。このような動詞の表現は「感情の [経験主] である人が [誘因] によって自然とそうなる」という自動詞構文を取る。一方, 英語の 'shock' は感情を誘発する外的な [誘因] を主語に, 感情を経験する [経験主] としての人間を目的語にとる他動詞であるので, 日本語の「(人が) ショックを受ける」に対応する英語表現は, [経験主], すなわち人間を主語とする受動文となる。ここでも日本語の干渉を受けて日本語で処理した結果の誤答と考えられる。このように日本語と英語において表現のあり方がずれるところは, 特に意識化して学ばせることが必要である。

【代名詞】

(47) I was surprised to find that (so many) students in my class went to the rock concert.

1. all of 2. almost 3. so many 4. most of

この問題も不正解率が著しく高いもので, 正答率は約 16% である。一番解答率の高かったのは, 'most of' (約 46%) であるが, この選択肢を選ぶ理由として, 先ず 'in my class' で限定された 'students' に定冠詞が必要だという感覚が希薄だと言えよう。併せて 'most of us', 'all of us' のような言い方の類推が働いたとも考えられる。しかし, 'most of' と同様不定代名詞に 'of' のついた形である 'all of' (約 11%) を選ばない理由ははっきりしない。これは, 選択肢の中で他の三つと意味合いが多少違うものを排除した結果であろうか ('all of us' だけ「すべての」というニュアンスを持っている)。ということであれば, 「ほとんどの, 多くの, たいていの」というニュアンスを持つ三つの選択肢のうちから, 'all of' という擬餌的選択肢を持つ 'most of' を選ぶという発想で, つまり語法の知識というよりむしろ「試験解答のテクニック」的発想で, 正解を選ぼうとしたと言える。また, 'most' と 'almost' とを混同した結果, 限定用法的に 'almost' を誤用したと考えられる答案もかなりあった (約 27%)。口語・方言のレベルで almost を most で代用することや, 英和辞典には, 'most of', 'most', 'almost' の訳語として「ほとんど」という語をあてていることが多いことなどが,

‘most’ と ‘almost’ を混同する原因だと考えられるが、以上いずれにしても、正解の ‘so many’ を選ばない理由は不明確であり、この問題の不正解には、‘most of’, ‘most’, ‘almost’ の用法や定冠詞の用法の曖昧な習得、学習方法自体のあり方など、様々な要因が複合していると考えられる。

[48] We had to wait (another) two hours to get on the train.

1. other 2. more 3. another 4. any

正答率が約 30%, 解答率は、2 が約 58%, 4 が約 6.5%, 1 が約 5.5% であった。この問題では、選択肢の選び方から見て、誤答は多いが、概ね英文の意味内容は理解されていると考えられる。要因として、複数形の名詞 ‘two hours’ をひとくくりにして限定する不定代名詞 ‘another’ の用法の理解が不十分であること、‘more’ であればその位置は ‘hours’ の前でなければならないことの不理解があげられよう。‘another’ が「もう一つ別の」という意味を持つということは記憶されていても、用法まで手が回らないということが推測されるが、単語の意味を一つ覚えておけば事足りるという学習法に安んじていてはいけないということが、学生に対して強調されなければならない。

【助動詞】

[50] Luke's birthday party (must have been) great. Everyone was talking about it the next day.

1. will have been 2. must have been
3. should have been 4. must be

[44] I can't find my umbrella. I must (have left) it in the restaurant last night.

1. be leaving 2. leave 3. have left 4. be left

(50) の正答率は 63%, 1 と 4 を選択した学生がそれぞれ約 13% である。又 [44] の正答率は約 70% で、4 を選択した学生は約 20% であった。二問とも「過去の出来事に対する話し手の判断」を表す「助動詞+

完了形 (have + 過去分詞)」の理解度を確かめる問題であり、正答率はかなり高い。しかし問題文の時制に関して注意を払っていない学生もいるので、そのことを念頭に置き授業を進める必要がある。

[45] If you have a cold, lack of sleep is very bad for you. So you (had better not) stay up late.

1. haven't better 2. didn't have better
3. had better not 4. had not better

‘had better’ が「～すべきだ、～するほうがよい」という意味である事は 80% を超える学生が知っているようではあるが、正答率は約 60% であり、約 20% の学生が 4 の ‘had not better’ を選択している。‘had better’ が一つの助動詞として機能しており、よって否定の ‘not’ は ‘had better’ の後に続く事をしっかり理解させる必要がある。

【to 不定詞】

[51] Since Nancy was feeling ill, she looked for something (to sit on).

1. to sit down 2. sitting down 3. to sit on
4. sitting on

[46] Leaving clean air and water for future generations is something (to be desired) by all people.

1. to desire 2. to desiring 3. to be desired
4. to have desired

[47] A: When is the soccer match?

B: It's scheduled (to be held) next Saturday.

1. held 2. to hold 3. to be held 4. being held

それぞれの正答率は、(51) が 33%, [46] が 55%, [47] が 52% であった。(51) で正答率が下がっているが、(51) の「座るもの」= ‘something to sit on’ や「書くもの」= ‘something to write with’ のように、to 不定詞の前に来る名詞句がその to 不定詞の伴う前置詞の目的語になる場合、難易度が上がることを示してい

る。

(51) で問題となっている部分が、「座るもの」という意味になるようにすればよいこと、そしてそれは答えの選択肢を見る限り to 不定詞の形容詞用法で処理すればよいこと、の二点は 75% の者は理解している。しかし、そのうち 42% は英語の 'sit' は自動詞で、「～に座る」に対応する英語は 'sit on something' と前置詞 'on' が必要であることに意識がいかず、動作の方向性を明示する副詞 'down' を伴う 1 の 'to sit down' を選択している。前置詞と副詞の区別があいまいで、'down' を前置詞的に考えた者もいたかもしれない。

[46] では半数以上が正答しているが、23% の者が 1 の 'to desire' を選択している。文末に 'by all people' とあるので、to 不定詞は受身の形が求められており、'something' はその意味上の主語になることが理解されるべきである。1 の 'to desire' を選んだ学生は、英語の形式と意味の対応関係に対する理解と注意が不足していて、単純に日本語で「全ての人が望んでいるもの」と能動的に考えてしまい間違えたものと思われる。

[47] における誤答は、1 の 'held' が 6%、2 の 'to hold' 19%、4 の 'being held' が 23% である。4 の 'being held' を選んだ学生は、主語の 'It' は 'the soccer match' を指示するので 'hold' は受身にしなければならないことはわかったようだが、'be scheduled to do' の形にそれを適用させることができなかったのであろう。2 の 'to hold' を選択した者は、主語の 'It' が何を指示するかがわかっていても動詞 'hold' とどのように意味的に関係づけられるかを考えるにいたらなかったようだ。

【分詞の形容詞用法】

(53) A: How did you like Linda's concert?

B: It was very (exciting)! I'd like to go again.

1. excited 2. exciting 3. excite 4. excites

[43] The explanation is so (confusing) I cannot understand it at all.

1. confuse 2. confuses 3. confused 4. confusing

分詞の形容詞用法の理解度を見る問題である。正答率は、(53)が63%、[43]が35%であった。この二つの問題で問われている英語の動詞 'excite' と 'confuse' に対応する日本語の動詞「興奮する」「混乱する、まごつく」は分詞構文の項目で触れたように、語義そのものに受身の意味が含意されている自動詞である。一方、それぞれに対応する英語の動詞 'excite' と 'confuse' は「外的な〈誘因〉が〈人〉を興奮させる」、「外的な〈誘因〉が〈人〉を混乱させる」という意味の他動詞であり、この日本語と英語の動詞間における意味のずれが混乱の原因と考えられる。(53) の正答率が [43] の二倍になっているのは、動詞 'excite' に関しては「人が興奮する = 'somebody is excited'」と「物や事が (人) を興奮させる = 'something is exciting'」の分詞の使い分けがある程度習得されているが、それが寺村の言う受身的感情表現一般に応用されるものとしては習得されていないことを示していると言えるだろう。

【並べ替え問題】

[51] The teacher gave Debbie's paper a bad grade because (it had nothing to do with the topic she was) supposed to write about.

1. she was 2. with the topic 3. nothing
4. it had 5. to do

正解率は約 47% であるが、下線部の 'nothing to do with the topic' という熟語を含む部分は約 80% の学生が正しく答えている。しかし、「何 (誰) がトピックと関連していない」のか、そして「誰が書くことになっていた」のかという主語の選択に至り、約 36% の学生が主語を取り違えている。「書くことになっている」のは「人」であり、そして 'supposed to write' の前には be 動詞がくることなどを考えれば、主語が 'she' であることはおのずと決まってくる。主語と述語の関係を考えることは、文を構成する際に最も重要なことの一つだということを十分に認識させる必要がある。

[52]... she was very upset to hear that (the flight she

had reserved was) canceled.

1. reserved 2. she 3. the flight 4. had 5. was

正解率は34%であるが、下線部の‘she had reserved’と‘was canceled’という意味のかたまりは約60%の者が作ることができた。しかし「彼女が予約した便がキャンセルされた」となると、‘she had reserved’を‘the flight’に後置できず、約30%の学生が日本語の語順と同じように‘the flight’の前に置いてしまっている。このように、日本語の語順が英語の後置修飾に対する理解を難しくしている。

(58) Charlie was wondering how (he should go to visit) his girlfriend in a hospital from his house.

1. to 2. visit 3. he 4. should 5. go

①正解の‘how (he should go to visit) his girlfriend’が約35%。次に多かったのが、

②‘how (to go he should visit) his girlfriend’が約30%、次に、

③‘how (should he go to visit) his girlfriend’が約10%であった。

③は問題文の意味を理解してはいるが、間接疑問文になった時に語順を「主語+動詞」に戻すことができなかつた典型的な誤答パターンである。一方②は文全体の意味を考慮せず、選択肢の中から‘how to go’と‘he should visit’の意味のかたまりを作り、つなぎ合わせている。それが全体として意味をなさないということに気付いて修正するに至らなかつたことは、意味を軽視していることの表れであろう。

(59) The building of freeways has been discussed. Obviously, a freeway would be (good for those who have) to drive a lot.

1. those 2. have 3. for 4. good 5. who

(60) Air pollution has probably been with us since man discovered fire. But it (was not until

people began to live) in cities that air pollution began to be a problem.

1. began 2. was not 3. people 4. until 5. to live

正答率は、(59)が47%で(60)が40%であった。両者とも誤答パターンに顕著な傾向が見られず、そのパターンも多様であった。このことは、(59)においては、「N is good for 人」と「those who + V」の表現が身に付いて使えるものになっていないことを表している。(60)においても‘it is(was) not until ~ that S+V ~’の表現形式について同様のことが言える。おそらく問題で扱われている表現パターンの意味は理解できるであろうが、それを使って英文を構成する段階には達していないことが問題である。

IV. まとめ

今回の分析結果から見えてきた、多くの誤答に共通する問題点を、次のように大きく二つにまとめた。

1. 英語を考える過程で母国語の日本語が干渉し、英語を日本語と同じように処理しようとする傾向が見られる。
2. 英語の動詞における自・他の区別に対する意識が希薄である。それが原因となって受身や分詞構文、分詞の形容詞用法などで理解の躓きが見られた。自・他の区別意識が薄いということは、英文の文構造を把握する力の不足にもつながっていると思われる。

これらの問題は、英語に触れる絶対量を増やすことを通して英語の語感を養っていくことがもちろん大切であるが、単に大量に触れさせるだけでは解決できるものでもない。英語の形式と意味との対応関係を分析的にとらえる習慣が身につくような指導のあり方が求められている。中でも、動詞の意味が文構造を決定する要であり、動詞を取り巻く名詞句が動詞とどのような意味関係で結合しているのかを常に意識させていくことが必要と思われる。

†本稿では平成16年4月実施の第一回試験の問題には()を、同年10月実施の第二回試験の問題には[]を問題番号に付している。各問題は選択肢から正解を

選んで番号で示す空所補充式の問題であるが、問題文の中で空所となっている () の部分には、説明の便宜上正解の語 (句) を入れて示した。また、最後の並べ替え問題については、選択肢の語句すべてを前後の文脈に合うように並べ替え、正しい順を番号によって示す問題形式であるが、本文中には並べ替えた語句をそのまま () に入れて示した。利用した市販の問題集は以下の 6 冊である。

柴田バネッサ, 小野聖次郎 (2003) 『絶対合格 英検準 2 級』高橋書店。

柴田バネッサ, 小野聖次郎 (2003) 『絶対合格 英検 2 級』高橋書店。

『2003 年度版英検準 2 級全問題集』旺文社。

『2003 年度版英検 2 級全問題集』旺文社。

『2004 年度版英検準 2 級全問題集』旺文社。

『2004 年度版英検 2 級全問題集』旺文社。

参考文献

『旺文社レクシス英和辞典』(2003) 旺文社。

『ジーニアス英和辞典』第 5 版 (1992), 大修館書店。

『リーダーズ英和辞典』第 17 刷 (1993), 研究社。

Oxford Collocations Dictionary for students of

English (2002), Oxford University Press.

井坂陽一郎 (2000) 「英語の時制の困難点を探る—より効果的な文法の授業を目指して—」文京女子短期大学英語英文学科紀要第 33 号 pp.99-120

宇津まり子 (2004) 「*Timed Reading* の利用とその効果」山形県立女子短期大学紀要第 39 号 pp.31-37

江川泰一郎 (1998) 『英文法解説 改訂三版』金子書房。

大塚高信, 小西友七 (1973) 『英語慣用法辞典改訂版』三省堂。

静 哲人 (2002) 『英語テスト作成の達人マニュアル』英語教育 21 世紀叢書 大修館書店。

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 1 巻』くろしお出版。

J.B. ヒートン (1992) 『コミュニカティブ・テストイング—英語テストの作り方—』語学教育研究所テスト研究グループ訳, 土屋澄男, 齋藤誠毅監修 研究社。

福嶋秩子, 関昭典, David Coulson (2004) 「学生の自律英語学習を促す総合的アプローチ—短大英文科における英語教育 10 年の総括—」県立新潟女子短期大学研究紀要第 41 号 pp.101-10.

吉川千鶴子 (1996) 『日英比較動詞の文法』くろしお出版。

(平成 16 年 10 月 29 日受理)